



HOMO FABER
Crafting a more human future



press release

HOMO FABER 2022

Special column vol. 03

須田 賢司 Kenji Suda

重要無形文化財「木工芸」保持者(人間国宝)

生きた素材と向き合う心。

原始より人類は石器をつかって木を削り、さまざまな暮らしの道具を作り出してきた。古代エジプトの遺跡からも趣向を凝らした調度品の数々が発掘されているように、紀元前にはすでに高度な木工技術を確立するなど、世紀を超えて、人は木と親しみ、生活を豊かに彩ってきた。

「陶芸や漆、金工、染織など、さまざまにある工芸のなかでも、木工は人類がいち早く手がけたものづくりであり、どの国にも見られる世界の共通言語といっても過言ではありません。これまでに我々が木工に携わった歴史をじっくりと追っていくと、木工藝が単に美しいものづくりを目指すだけでなく、何千年ものあいだ木と向き合ってきた人々の思いまでも意識しながら関わっていかねばいけないと強く感じます」

祖父、父ともに木工に関わる家に育った須田賢司。親から跡を継ぐようにと強制されたことは一度もなかったが、幼い頃から工房の鉋屑にまみれながら遊んでいた彼が木工藝の道に進むのは、いたって自然な成り行きだった。しかしながら、実際に自身で作品をつくり始めるようになると、不確かな思いが心の隅をよぎる。

「仕事を始めた1970年代初頭は、学生運動の影響もあって、若者が皆、生きる理由について熱く語っていた時代。僕も仲間『木考会』というチームをつくり、顔を突き合わせながら、木でものづくりをする意義について熱く議論していたのを記憶しています。さまざまに意見を交わすなかで、求められる用途、目的に応じて、木工は細やかに調整可能であること。使う人の個性に合わせた一点モノがつかれることなどを自覚。社会としっかり向き合いながら、木工に従事していく覚悟ができたのです」

限定的ながら機能性を持ち、確かに使える精緻な道具であることが工芸の基本だが、そこに季節や時の移ろい、使う人への思い、空間との調和など、作り手やもてなす側の思想や態度が美しく反映されているのが日本の伝統工芸の真髄だと語る。

さらに木工では、何百と存在する材木のなかから用途や作業に適した素材を厳選。工程ごとに的確な道具を用い、丁寧な作業を重ねていく。木という生きた素材を相手にするからこそ、その選択は一つたりとも間違えることはできない。

「木工の歴史はじっくりと時間をかけて、地道に成長を重ねきた文化です。エポックと呼べ

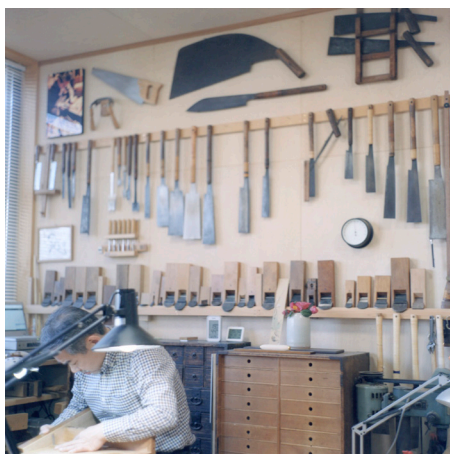
るような画期的な時代があったわけでも、専門的な研究がなされてきたわけでもない。だから自ら過去の資料や文献を紐解き、そこに自分なりの見識を重ね、現代に生きる木工藝を切り開いていかなければならないと感じています」

ときに海外の学者や考古学者と顔を突き合わせ議論を交わし、一方で最新の加工技術や素材研究にも取り組む。高い美意識の裏に、こうした堅実で真摯な姿勢があるからこそ、須田の作品は唯一無二の存在でいられるのだ。

始まりは自然の成り行きだったが、いまでは自らが必然のなかに生きていくと語る須田賢司。正統な木工藝の伝承者であるという確かな思いとともに、さらに深く、豊かな表現を目指し、これからも邁進を続ける。



©Shunji Tanaka



須田 賢司/すだ けんじ

1954年、祖父の代から続く木工家の家に生まれる。高校を卒業後、1973年より父・須田桑翠に師事し、木工藝の技法を習得する。1975年日本伝統工芸展に初入選。清らかで雅な独自の作風を確立し、国内外で高い評価を受ける。木工の文化研究にも勤しみ、2015年に『木工藝 清雅を標に』を上梓。1992年群馬県甘楽町に工房を移す。2010年紫綬褒章受章。2014年に重要無形文化財「木工芸」保持者(人間国宝)認定される。